

# 音楽による気分誘導が文章の解釈に及ぼす影響

吉野 巖

(北海道教育大学札幌校)

key words: 音楽、気分誘導、文章解釈

音楽による気分誘導が我々の認知、行動や思考に影響することは様々な先行研究によって確かめられている。例えば、谷口(1991)は、音楽を聴かせながら単語(曖昧な性格形容語)の解釈を行わせたところ、明るい音楽を聴いた群は単語をよりポジティブに、暗い音楽を聴いた群はよりネガティブに解釈する、などの単語レベルでの気分一致効果を見いだした。本研究は、音楽による気分誘導が文章の解釈に影響するかどうかを調べる。具体的には、結末がポジティブになるかネガティブになるかわからない“曖昧文章”と気分を誘導する音楽(抑うつ気分を誘導する“抑うつ音楽”、高揚気分を誘導する“高揚音楽”)を用意し、“音楽聴取 文章読解 結末の予想”という1試行の中で音楽の種類が結末の予想へ与える影響を2つの実験で調べた。しかし、この目的を被験者に悟られることは好ましくない。そこで、音楽聴取の後に“文章と音楽の合致度を評定させる”ダミー課題を用意し、被験者には“実験は文章と音楽の合致度を調べるためのもので、1試行は文章読解 結末の予想 音楽聴取 合致度評定(ダミー課題)で終わる”という偽の情報を与えた。こうした実験手続きをとるため、実験デザイン上必要な音楽材料と文章材料の組み合わせに加えて、被験者にとっての第1試行で提示する曖昧文章並びに結末に関する問いと、最終試行で提示する音楽が必要となる(いずれもダミー材料)。

## 実験1

聴取音楽が被験者内要因であり、被験者は抑うつ・高揚の両音楽条件がランダムに繰り返される状況で課題を行った。

## 方法

**被験者** 北海道教育大札幌校の学生80名(男:39,女:41名)

**音楽材料** 気分を誘導する音楽として、谷口(1995)が被験者に音楽聴取後に行わせた多面的感情状態尺度・短縮版(MMS)の各尺度で高得点を得た楽曲(全てクラシック音楽の小品)を用いた。すなわち、抑うつ音楽としては“抑うつ・不安尺度”の上位5曲、高揚音楽としては“活動的快尺度”の上位5曲をそれぞれ使用した(表1参照)。各々の楽曲の長さは2分半から8分であったが、被験者の負担を考慮して全て3分以内になるよう部分的削除などの編集を行った。また被験者にとっての最終試行(第11試行)で提示するダミー用楽曲も1曲用意した。楽曲の読込・編集・記録はiMac上でiTuneとSoundEdit16を使用して行い、CD-Rに記録した。

**文章材料** 曖昧文章を11編使用した(1編はダミー)。これらは、中立的な結末は存在しないような事柄の物語で、結末がポジティブになるかネガティブになるかわからないように作成したものである(図1参照)。各曖昧文章の字数は160~230字の範囲であった。各文章に対して、予想される結末がポジティブになるかネガティブになるかを2択で答えさせる問いを用意した。なお、これら11編の文章は、20編用意したものの中から予備実験で30名の被験者の結末の予想がほぼ半数ずつに分かれたものを選んだものである。

表1. 実験1と実験2で使用した音楽材料

抑うつ音楽		高揚音楽	
アルビノーニ アダージョ		ヘンデル シバの女王の入城	
ヴェルディ 椿姫~第3幕前奏曲		J.シュトラウス こうもり序曲	
シベリウス トゥオネラの白鳥		スツペ 軽騎兵序曲	
ヴィヴァルディ 秋~第2楽章		L.アンダーソン ラッパ吹きの休日	
サティ グノシエンヌ第4番		ヘンデル 王宮の花火の音楽~序曲	

太郎は、その日、かさを持たずに学校へ行った。太郎は、学校へ向かう途中で今朝の天気予報で、「今日は午後から降水確率が50%です」というニュースを聞いたことを思い出した。帰り道で雨に降られないか心配だったが、家に引き返すのも面倒なので、太郎はそのまま学校へと向かった。午後になり、太郎が家へ帰る時間となった。太郎は学校の玄関を出た。

雨は降っていたでしょうか 深く考えずに、いずれかに○を付けてください  
・降っていた ・降っていなかった

図1. 実験で用いた曖昧文章と結末に関する問いの例

**手続き** 被験者は、被験者にとっての1試行“曖昧文章の読解 結末に関する問いへの解答 音楽の聴取 文章と音楽の合致度の評定(ダミー課題)”を11試行(実際は“音楽聴取 文章読解 結末の予想”を1試行とする10試行)を行った。ダミー課題は、文章とその後聴取した音楽との合致度について、1(合っていない)~5(合っている)までの5段階で評定することであった。実験は2~4名ごとに静かな実験室で行い、提示する音楽と文章の組み合わせ、及び提示順序はそのグループごとにランダムなものとした。

## 結果と考察

結末の予想でネガティブな選択肢を選んだ場合: 1、ポジティブな選択肢を選んだ場合: 0として数値化し、各音楽条件5試行の総和(ネガティブ解釈点)を求めた(最大値: 5、最小値: 0)。この値の平均は、抑うつ条件で2.49(SD: 1.30)、高揚条件で2.04(SD:1.24)であった。t検定の結果、高揚条件ではチャンスレベルである2.5との間に有意な差が見られたが( $t=3.32, p<.01$ )、抑うつ条件では有意な差は見られなかった( $t=0.08, ns$ )。音楽による気分誘導効果は高揚条件では見られたが、抑うつ条件ではなかったことになる。

## 実験2

実験1では抑うつ音楽と高揚音楽をランダムな順序で提示したため、気分誘導効果が小さかった可能性がある。そこで実験2では聴取音楽を被験者間要因とし、抑うつ群は抑うつ音楽のみ、高揚群は高揚音楽のみを提示して実験を行った。

## 方法

**被験者** 札幌大谷短期大学の女子短大生175名(抑うつ群84名、高揚群91名)であった。

**材料** 音楽材料は実験1と同一である。曖昧文章は実験1で使用した11編のうち6編を両群共に使用した(1編はダミー)。

**手続き** 両群共に6試行を実験1と同様の手続きで行った。ただし、視聴覚教室で各群ごとに全員一斉に行った。

## 結果と考察

各群の5試行分のネガティブ解釈点は、抑うつ群が2.35(SD:0.76)、高揚群が2.12(SD:0.86)であった。t検定の結果、高揚群の解釈点はチャンスレベル2.5よりも $t=3.80, p<.01$ 、並びに抑うつ群の平均値よりも $t=1.73, p<.05$ 有意に低かった。本質的に実験1と同じ結果が得られたといえる。

## 総合的考察

高揚条件のみではあるが気分誘導効果が見られたことから、文章を解釈するというレベルの認知行為にも音楽は影響しうることが示唆された。多くの先行研究と同様に、気分効果の非対称性が見られたが、音楽は非常に強いネガティブ感情を喚起することが少ないこと(谷口, 1998)、PNA現象(Clark & Isen, 1982)などによる説明が可能であろう。(YOSHINO Iwao, E-mail: yosino@sap.hokkyodai.ac.jp)